

資料 16 ^{イズモノクニノミヤツコノカムヨゴト} 出雲 国 造 神賀詞 (山田孝雄による書き下し)

八十日日は在れども、今日の生く日の足る日に出雲ノ国の国ノ造姓名^{カシコ} 恐み恐みも、申し賜はく、

挂^{カケ}まくも恐き明御神と大八嶋ノ国知ろしめす天皇命の大御世を手長の大御世と齋ふと為て、出雲ノ国の青垣山の内に下つ石根に宮柱太知り立て、高天ノ原に千木高知り坐す伊射那伎の日真名子加夫呂伎熊野大神櫛御気野命 国作り坐し大穴持命、二柱の神を始めて、百八十六社に坐す皇神等を某甲が弱肩に太襷取り掛けて、伊都幣の緒結び、天の美賀祓冠りて、伊豆の真屋に簍草を伊豆の席と苜敷きて、伊都閉黒まし、天の甕和に齋みこもりて、志都宮に忌い静め仕へ奉りて、朝日の豊栄登に伊波比の返事の神賀吉詞を奏し賜はくと奏す。

高天^{タカマ}の神王、高御魂命の皇御孫ノ命に天下大八嶋ノ国を事^サ避り奉りし時、出雲臣等が遠祖^{トボツオヤ}、天穗比命を国体見に遣はしし時に、天の八重雲を押し別けて、天翔り国翔りて天下を見廻りて返事申し給はく、豊葦原の水穂ノ国は昼は五月蠅如す水沸き夜は火爇の如く光く神在り。石根本立青水沫も事問ひて荒ぶる国なり。然れども鎮め平けて皇御孫命に安国と平けく知ろしめし坐さしめむと申して己^{オノレ}命の児、天夷鳥命に布都怒志命を副へて天降し遣して荒ぶる神等を撥ひ平け、国作しし大神をも媚び鎮めて大八嶋国の現事^{ウツシアラハニゴト} 顕事、事避らしめき。乃^{スナハチ} 大穴持命の申し給はく、皇御孫命の静まり坐さむ大倭ノ国と申して己命の和魂を八咫鏡に取り託けて倭大物主櫛瓊玉命と御名を称へて大御和の神奈備に坐させ、己命の御子、阿遲須伎高孫根の命の御魂を葛木の鴨の神奈備に坐させ、事代主命の御魂を宇奈提に坐させ、賀夜奈流美命の御魂を飛鳥の神奈備に坐させて皇御孫ノ命の近き守神と貢り置きて八百丹杵築宮に静まり坐しき。是に親神魯伎神魯美の命の宣はく、汝天ノ穗比ノ命は天皇命の手長の大御世を堅石に常石に伊波ひ奉り、伊賀志の御世に幸はへ奉れと仰せ賜ひし次の随まに供齋仕え奉りて朝日の豊栄登に神の礼白、臣の礼白と御禱の神宝^{ミホギ} 献はくと奏す。

白玉の大御白髪在し、赤玉の大阿加良び坐し、青玉の水江ノ玉の行相に明御神と大八嶋ノ国知ろしめす天皇の手長の大御世を御横刀広らに誅ち堅め、白き御馬の前ノ足の爪、後足の爪の踏み立つる事は大宮の内外の御門の柱を上つ石根に踏み堅め、下ツ石根に踏凝し立て、振り立つる耳の弥高に天ノ下を知ろしめさむ事の志のため、白鵠の生御調の玩物と倭文の大御心も多親に、彼方の古川(席)岸此方の古川(席)岸に生り立てる若水沼間の弥若叡に御若叡坐し、須すぎ振る遠止の美の水の弥乎知に御衰知坐し、麻蘇比の大御鏡の面をおしはるかして見そなはす事のごとく、明ツ御神の大八嶋ノ国を天地日月と共に安けく平けく知しめさむ事の志の太米と御禱の神宝を撃げ持ちて神の礼白、臣の礼白と恐み恐みも天つ次の神賀ノ吉詞^{ツギテ} 白し賜はくと奏す。

「出雲国造神賀詞」は、「延喜式」巻八祝詞篇に掲載されている。上の文章は、山田孝雄が、その九条家本を底本とし校訂を加えた上で書き下した全文。フリガナも山田によるが、旧漢字は新漢字にした。校訂本文(宣命体の漢文)と現代口語訳は割愛した。

山田孝雄『出雲国造神賀詞義解』出雲大社教教務本庁、1960(国会図書館デジタルコレクションより)